

うるま市 地名散歩

名嘉山 兼宏

28

美原 (ミハラ)

うるま市には、先史時代の伊波貝塚はじめ、金武湾岸沿いに、隅原・天願・宇堅・アカジャンガーと続き、その延長線上に敷地、浜比嘉、津堅、平安座、宮城、伊計の島々に多くの遺跡が分布している。

美原には西側の斜面一带に美原遺跡があり、土器や磨製石器が採集されている。また東方のタカビラ遺跡からは土器の細片が出土しているが、詳しい調査はまだ実施されていない。

美原は金武湾に臨み、石川岳をはじめ山原の山々を近くに、また遙かに金武崎などを望むことができ、その名「美原」の通り風光明媚なところである。以前は道路も整備されてなく、位置的にも県道329号線の裏側の地で、昆布の海岸から美原入口までは一軒の家もないほどの田舎の地であった。近年は石川、東恩納とつながる道路が整備され、沿線には「自動車

学校」(自練)はじめ、住宅、眺望のよい海岸よりにはアパートやマンションが建つようになった。

美原の誕生

県道75号線から美原に入る信号をそのまま直進して長い坂を行くと、東恩納三叉路手前の左手に十数軒ほどの小さな集落がある。この集落はかつて美久地と呼ばれていた。戦後この美久地と後原の二つの屋取集落が合併して「美原」という美称地名が誕生した。『石川市史』に「美久地の美と後原の原をとって美原と呼ばれる行政区になった」とある。しかし、この美原地名については、東恩納から後原へ下りる坂道一带が美川原と呼ばれる小字地名があり、この美川の美と後原の原をとって美原にした、という言い伝えもある。

後原は本字である東恩納の後方に位置するので後ろの意味、東恩納の前の方にあるのが前原である。後原も前原も県内の小字地名として数多く存在するが、前原については平成17年の二市二町合併の際、具志川の前原との混同を避けるため「石川前原」としている。

美久地の集落は、崖地に囲まれた凹地に位置する。その意味について、地形から考察すると「ミ」

は接頭語で、「クジ」は崩れ、崖地のことで、崖地に囲まれたところと解される。

かつて十数戸からなる片田舎でひっそりと佇んでいた集落だったが、近年は周辺に住宅やゴルフ場、福祉施設、保育園などが立地し、発展拡大して後原や隣りの昆布と接する状況である。この集落の一角に大きなヤマモモの木があり、少年の頃その実がなる季節になるとこの木の下を通るのが楽しみであった。美久地は、位置的には昆布と近いので嫁取り婿取りがある。

恩納崎とモーモー松

美原から石川に向かうと右手に県企業局石川浄水場がある。この一角は、恩納崎原と呼ばれ、その先端が恩納崎である。東恩納の海岸になぜ「恩納」地名があるのか。恩納といえは万座毛のある西海岸のほうである。よく調べてみると東恩納はかつては恩納と呼ばれていた、一六七三年恩納間切が新設された時に、恩納間切の恩納村と区別するために西の恩納村に対し東の恩納村といことで東恩納としたとされる。しかし間切新設以前にできた『琉球国高覧帳』(一六三五

一六四八年)にはすでに「越來間切恩納村」と出ている。またそ

れ以前の東恩納ノロの辞令書にも「東恩納」の文字がみられるというから、それ以前から東恩納と呼ばれていたと考えられる。『大日本地名辞典』(吉田東伍・第八巻・富山書房)に「現今、東恩納の海岸に恩納崎の小字あり、古名を伝ふるものなり」とあるように、地名は歴史の証人といわれる例である。

その恩納崎の北西の基部あたりにモーモーマーチと呼ばれる一本松があった。牛をつなぐところだったので、牛の鳴き声の「モーモー」からそう呼ばれた。また金武湾を吹き上げる北風が松の枝にあたって「モーモー」という、これもまた牛の鳴き声に聞こえたからともいう。

松は位置や場所を示す立派な地名である。地域で「く松」のことろと言えば、どこそこということが共通理解されていた。うるま市内にはその枝ぶりの美しさで知られた石川赤崎の一本松、南風原勢理客原の一本松などがあった。

各字内にはそれぞれ「マーチ」と呼ばれるいわれのある松があった。しかし近年は幼いころ遊び親しんできたその思い出の松は枯れたり、倒壊したりほとんど消失し、寂しい思いがする。